

2025年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

専門科目 日本思想史 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

受験記号番号

2025年

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選拔) 問題

専門科目 (日本思想史 専攻分野)

1. 今後研究しようとするテーマの思想史学上の研究意義について論じなさい (20行程度)。

成績

1/6

受験記号番号	
--------	--

二、次の①～③について簡潔に説明せよ。(各5行程度)。

①日本仏教と女人救済

②近世儒学と家族道徳

③明治民法と家父長制

三、次の史料を読んで、以下の問いに答えなさい。

娘の嫁入りは恰も富籤とぎけんを買うが如し。中るも中らざるも運は天に在り。否、夫の心次第にて、極楽もあり地獄もあり。苦楽喜憂、恰も男子手中の玩弄物と云うも可なり。斯くまでに不安心なる女子の身の上に就き、父母たる者が其の行く末を案じて、ために安身立命の法を講ずるは親子天然の至情ならずや。即ち、女子の為に文明教育の大切なる所以ゆえんなり。仮令博識の大学者たゞざるも、人事の大概に通達して、先ず自身の何者たるを知り、其の男子に対するの輕重を測り、男女平等、不輕不重の原則を明らかにし、内に深く身權を持張して、自尊自重、敢えて動揺せざるまでの見識を得せしむるは、子を受する父母の義務なる可し。又旧『女大学』の末文に、「〇百万錢を出だして女子を嫁せしむるは、十万錢を出だして子を教うるに若かず云々」の意を記したるは敬服の至りなれども、我輩は一步を進めて、娘の結婚には衣装万端支度の外に、相当の財産分配を勧告する者なり。生計不如意の家は扱置きざおぎ、苟いさしくも資力あらん者は、仮令娘を手放して人の妻にするも、万一の場合に他人を煩わさずして自立する丈の基本財産を与えて、生涯の安心を得せしむるは是れ亦父母の本意なる可し。古風の教えに「婦人の三従」と称し、「幼にして父母に従い、嫁して夫に従い、老して子に従う」と云うが如き、徳義一偏より云えば或は不可なきが如くなれども、定めなき世の心波情海を渡らんとするには、人事の浮沈常ならずして、彼の夫に従い子に従うと云う其の従順は、化して屈服盲従の姿と為り、万事不如意に苦しむの例なきに非ず。主人の食欲不人情、「竈の下おれの灰までも乃公の物なり」と絶叫して傍若無人ならんには、如何に従順なる婦人も思案に余ることある可し。此の時に当たり、婦人の身に付きたる資力は自ら強うするの便りにして、徐々に「謀」を為すこと易し。仮令斯くまでの極端に至らざるも、婦人の私わたくしに自力自立の覚悟あれば、夫婦相對して夫に求むることも少なく、之を求めて得ざるの不平もなく、筆端或は皮肉に立ち入りて卑陋なるが如くなれども、其のこれを求めざるは両者の間に意見の衝突を少なくするの一助たる可し。古語に「衣食足りて礼讓興る」と云う。婦人の資力なきは、喩えば衣食足らざるものの如し。父母たる者が之に財産を分与するは、我が愛女に衣食を豊かにして夫婦の礼を知らしむるの道なりと知る可し。但し、婦人に財産を与えても、自ら之を処理するの法を知らざれば、幾千万の金も有つて無きが如し。既に之を所有すれば、其の安全を謀り其の用法を工夫し、世間の事情を察し、又人の言を聞き、妄りに疑う可からず、妄りに信ず可からず。詰まり自分一人の責任にこそあれば、之に処するの法、決して易からず。西洋諸国良家の女子には、此の辺の事に就いて漠然たゞざる者多しと云う。〇 等閑に看過す可からざる所のものなり。

(1) 傍線部 (ア) 「百万銭を出だして女子を嫁せしむるは、十万銭を出だして子を教ふるに若かず」という格言の意味を解説し、その格言に対する著者 (福沢諭吉) の見解を史料の内容に即して説明しなさい (各4行程度)。

格言の意味：

著者の見解：

(2) 著者が傍線部 (イ) 「等閑に看過す可からざる所のものなり。」という感想を抱いたのはなぜか。史料全体の内容を踏まえて具体的に説明しなさい (10行程度)。

受験記号番号	
--------	--

以下の答案用紙は、下書き用に使ってください。

This image shows a single page of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.